

コロナ禍における（陰謀論的）スピリチュアリティの展開

伊 藤 雅 之

1 陰謀論とスピリチュアリティ文化の融合

2011年、シャーロット・ウォードとデビッド・ヴォアスは、*Journal of Contemporary Religion* 誌に発表した論文のなかで陰謀論（conspiracy）とニューエイジのスピリチュアリティの融合を表現するために、「conspirituallity」（以下、陰謀論的スピリチュアリティ）という概念を初めて用いた（Ward and Voas 2011）。ウォードらはこれを「政治的な幻滅と代替的な世界観の流行に後押しされた特定のイデオロギーを表明する、ウェブ上で急速に増大しつつある運動」と定義している。1990年代後半以降に発達したこの運動のなかには、国際的な著名人、ベストセラー作品、ラジオやテレビ番組の一部も含まれる。その担い手たちは、1）秘密集団が政治と社会の秩序を密かに支配している、あるいは支配しようとしている、2）人類は意識の「パラダイムシフト」を経験している、という2つの信念を核とした幅広い政治・精神哲学を提唱する。そして全体主義的な「新しい世界秩序」の脅威に対処するための最善の戦略は、目覚めた「新しいパラダイム」の世界観に従って行動することであるとしている。こうした信念が陰謀論的スピリチュアリティの特徴となる。

一見すると、陰謀論者とホリスティックな世界観を掲げるスピリチュアリティ文化の担い手との間には、大きな溝があるように思われる。前者は男性が多く、保守的で、一般に悲観的で、時事問題に強い関心をもつ（Uscinski 2020=2022）。後者は女性が多く、リベラルで、楽観的であり、社会問題よりも自己の探求や個人的な人間関係を重視するからである（Heelas and Woodhead 2005, 伊

藤 2021）。しかし両者は、政府や主要メディアなどの権威への疑問、代替医療の重視、既存の社会制度への不信など、いくつかの文化的、社会的特徴において共通点をもつ。

ヴォアスによれば、2011年に出版されたこの論文は、「学術論文の大半の運命と同じく、ほとんど誰にも気づかれなかったのだが、最近になって主要メディアで取り上げられるようになってきた」という。以前は一部の人たちによる狂信的信念と捉えられていた陰謀論的スピリチュアリティだが、YouTube や Twitter などの SNS による情報発信によって、一般の人たちの関心を集めるようになったのである。その原因の1つはアメリカ政治が二極化していること、そしてもう1つがコロナ・パンデミックのグローバルな広がりや2021年当時に進行中だったワクチン接種プログラムである（Voas 2021）。

この運動体の賛同者のなかには、水牛の角の頭飾りをつけて2021年1月6日にアメリカ連邦議会会議事堂へ侵入した自称「シャーマン」こと、ジ



アメリカ連邦議会会議事堂への侵入者たち、中央はQシャーマンこと、ジェイク・アンジェリ

エイク・アンジェリの存在がある。アンジェリは、逮捕後に彼の弁護士を通じてオーガニックな食生活をするヨガの実践者ということが判明し、陰謀論的スピリチュアリティの存在を一般社会に広めることになった (Evans 2020)。

また地域レベルでは、ヨガクラスにおいても彼らは活動している。狭義の陰謀論的スピリチュアリティの支持者たちは、全体主義的な「ディープステート (闇の国家)」, 「新しい世界秩序」の脅威に対処するための最良の戦略は、「新しいパラダイム」の世界観に従って行動することだと信じている者を指す。より広い意味では、陰謀論もスピリチュアルな目覚めも熱心に信じているわけではないが、こうした考えの一部には耳を傾けている人たちが対象となる。この運動への共鳴者は、ヨガ、気功、アーユルヴェーダ、マクロビオティックなど心身のホリスティックな健康を重視するウェルネス・コミュニティに属する人たちを中心に相当数にのぼると考えられる。

本稿では、おもに欧米諸国を念頭におき、2020年初頭からの約2年間にわたるコロナ・パンデミックのなかで顕著となった陰謀論とスピリチュアリティ文化の結びつきの実態を究明する。それを通じて、ホリスティックな世界観を掲げ、自己の聖性や個人的探求を重視する現代スピリチュアリティ文化は、ときとして主流文化から「逸脱」し、陰謀論に陥るあやうさのあることを論じる。また、別の角度から見れば、代替医療を含むオルタナティブなパラダイムに立脚する現代スピリチュアリティは、主流文化がはらむ問題性に異議申し立てする役割を担うことを示したい。さらに、コロナ・パンデミックは、現代社会に生きる人たちの世界観を露呈させる契機となったばかりでなく、研究者自身が拠り所とする対象へのアプローチや研究視座を浮き上がらせるきっかけにもなっている。陰謀論を社会からの逸脱と捉えず、現代社会において生起する複数の物語 (ナラティブ) として扱う文化社会的アプローチにも着目しつつ、本稿を論じていくことにする。なお、本稿では多様な陰謀論的言説を価値中立的に捉えるため、タイトルは (陰謀論的) と括弧に入れてい

る。しかし、本論文では本来すべてを (陰謀論) あるいは「陰謀論」と表記すべきところ、煩雑さを避けるため括弧をつけていないことをあらかじめ断っておく。

2 コロナ禍での陰謀論的世界観の構築

1) Qアノンの誕生と発展

2021年1月6日、アメリカ連邦議会議事堂へのトランプ支持者による侵入事件が勃発した。侵入者のなかにQアノンの支持者が多く含まれていたことがメディアの報道で明らかとなる。Qアノンとは、2017年10月に4chan (日本の2ちゃんねるに相当、後に8chan, 8kunへ移行) に、Qと名乗る匿名ユーザーによる書き込みが開始されたことに端を発するメディア上を中心とした運動である。Qによる投稿は、Qドロップス、またはパンくずと呼ばれ、4000通を超える。Facebookには数千のQアノン系のグループが存在する。Qアノンをはじめとする陰謀論的スピリチュアリティは、指導者が拡散し、関心領域が常に変化するウェブ上の運動のため、その正確な影響力を推し量ることは難しい。しかし、何百万人もの人びとが彼らのメッセージに触れ、そのうちの相当数がその信条を支持していると考えられる。

Qアノンによれば、現代世界はディープステートにより支配されている。ディープステートには、民主党トップクラスの人たち、ハリウッドのセレブ、グローバルビジネス界のエリートたちが多数含まれる。最近では世界経済フォーラム主催のクラウス・シュワブ、ビル&メリнда・ゲイツ財団主催のビル・ゲイツ、アメリカ国立アレルギー・感染症研究所所長のアントニー・ファウチなどが、そのメンバーに含まれると考えられている。彼らは、悪魔崇拝しているエリートたちで、小児性愛、児童人身売買をする秘密結社を構成する。その悪と戦うのがトランプ前大統領である。トランプは、悪の秘密をすべて暴き、敵を倒す「嵐 (storm)」をもたらす存在である。それは2020年11月の大統領選で勝利する日に達成すると信じられていた。結果的には、民主党や大手メディアが結託した不正選挙によりそれは実現しな



2021年1月6日 アメリカ連邦議会議事堂前の様子



「WWG1WGA (Where we go one, where we go all)」
と記されたQアノンの旗

かったと理解されている（Hoback 2021, 佐藤 2021, 井上・渡辺 2021）。

コロナ・パンデミックのなかで、Qアノンは急激に勢力を拡大し、狂信的なネット上の集団から主流のムーブメントとなる。その象徴的出来事が冒頭で紹介したアメリカ連邦議会議事堂侵入事件である。コロナ禍において、多くの国ではロックダウンとなり、オンラインで過ごす時間が増える。今後の見通しについての不安が増大するなか、ネット上で陰謀論が爆発的に広まる。コロナとコロナ・ワクチンへのQアノンの主張は、「ワクチンは危険」、「パンデミックには計画されたシナリオがある」、また「世界保健機関や主要メディアは信用できない」などといったものである。

Qアノンは個人的な自由の利かないコロナ禍において、「大いなる目覚め（the great awakening）」「WWG1WGA (Where we go one, we go all)」同じ目的地に一緒に行こう」「自分で調べなさい（Do your research）」といったスローガンを掲げ、コロナ・パンデミックを生み出したディープステートの陰謀を暴き、真実をつきとめるという（自己決定権を信奉者自身に付与する）エンパワーメントの物語を提供する。

2020年7、8月頃になると、Facebook、TwitterはQアノン関連の偽情報を削除しはじめる。そして2021年1月、ジョー・バイデンが大統領に就任する。Qアノンが主張していた「嵐」は起こらなかったため、信者の多くは離反した。しかし、別の嵐を信じる人たちの活動は続いている。

2) パステルQアノンの展開

コロナ・パンデミックの広がりを受けて、2020年以降になると、Qアノンの活動はアメリカ以外の国にも広がる。たとえば、イギリス、ドイツ、フランス、カナダ、オーストラリアなどの反ワクチンデモにおいて、Qアノンの看板を振る人びとの存在が確認されるようになる。また、男性中心であった支持層は、女性中心のウェルネス・コミュニティへと拡大する。

2020年以降、多くのヨガや瞑想の指導者たち、より広くはニューエイジ（ホリスティックヘルスほか）のインフルエンサーたちはQアノンのメッセージや物語を共有するようになる。こうした人びとは、パンデミックはデマであり、政府は人びとを操っていると示唆し、Qアノン関係者を自らの（音声・動画などのデータをネット上で公開する）ポッドキャスト、YouTubeチャンネルに招き、メッセージを拡散する。彼らは操り人形を操る存在に対抗することを「スピリチュアルな戦い」と標榜する。

ヨガ界における活動家たちは、コロナ・パンデミックをめぐるインスタグラムの投稿のデザインを工夫し、パステルカラーの色合いを使用し、スピリチュアルな啓発メッセージ、美しい夕日、ヨガのポーズなどと一緒に陰謀論的メッセージを載せる傾向にある。そのため、カナダ・コンコルディア大学の研究者マルク＝アンドレ・アルヘンティーノは、反ワクチンに関する一連の活動を

「パステルQアノン」と名づけた。これは、ヨガや健康関連グループのみでなく、子育てサークルにも入り込んでいる (McGowan 2021, Meyer 2021)。

Qアノンはヨガ界に浸透すると同時に、2020年7月には、正当な人身売買防止チャリティのための募金活動としてはじまった「save the children」運動を乗っ取る。このハッシュタグを広く使い、民主党やハリウッドの著名人たちが主導する世界的な小児性愛、児童人身売買についての虚偽、または誇張を拡散させていったのである。

ウェルネス・コミュニティに陰謀論を広げた主要な人物を紹介しよう。たとえば、クンドリニー・ヨガの著名な教師であるグル・ジャガットは、Qアノンの陰謀論者ケリー・キャシディを YouTube でインタビューし、また自身のインスタグラムにおいて、「事実が事実でない、真実が真実でない時代、あなたがあなた自身の真実の道を歩むことができますように」と投稿している (Guerin 2021)。新聞・テレビなどのマスコミにおいて真実が伝えられることはなく、自らで調べて真実の道を進むことの必要性を説く、パステルQアノンのメッセージをここに見出すことができる。

SNS の情報にふれることで陰謀論的世界観が形成される事例も確認しよう。あるヨガの実践者は、SNS で調べるうちに、「何もかもが見かけ通りではなく、社会を支配するために慎重に組み立てられた物語なのだと確信するようになった」と報告している。

私が学んでいることのすべてと、私がこれまで恐れていたことのすべてがつながりました。少なくとも、私が読んだことのある部分は真実であると確信したのです。この前代未聞の大混乱の時代に、私は自分の考えを広げて、まったく別の説を考えてみようと思ったのです。もし、何もかもが見かけ通りでなかったとしたら？ それは衝撃的で、恐ろしく、また、奇妙な心地よさでした。私が知っていると感じていたことは真実であり、他の人たちも同じことを知っていたのです。私が見た「真実」は腹立たしく、他の人が「目覚

める」のを助けなければならないと感じました。(Wiseman 2021)

「何もかもが見かけ通りでなかったとしたら」という問いかけとそれに対する恐ろしさと同時に心地よさを感じていること、また自らの目覚めとともにほかの人たちを救済しようとする姿勢は、ウェルネス・コミュニティにおいて陰謀論的スピリチュアリティが確立されている状況を如実に示している。

3) ヨガ業界に根づくワクチン接種への反発

2021年5月、デジタルヘイト対策センター (Center for Countering Digital Hate, CCDH) において、Facebook と Twitter 上の反ワクチンコンテンツの65%近くは12のインフルエンサーにより担われているとの報告があった。反ワクチンを先導する人たちの多くはウェルネス・コミュニティに関わる代替医療の起業家であり、毎日数百万人のユーザーにメッセージを発信している (Guardian 2021)。その具体例として、つぎの人物を挙げることができる。

- ・ジョセフ・マーコラ アメリカ・ウェルネス産業の起業家。コロナに関する偽情報をオンライン上でもっとも広めた人物と呼ばれている。
- ・ロバート・ケネディ Jr 元司法長官ロバート・ケネディの息子。弁護士でアメリカの環境活動家。反ワクチン運動を主導。
- ・クリスティアン・ノースラップ博士 ウェルネスの専門家、Facebook のフォロワーは56万人。ドキュメンタリー『プランデミック』を紹介し、人気を集めるのに貢献。
- ・ケリー・プロガン ハリウッド女優グウィネス・パルトローが手がける美と健康に関するホームページ『Goop』への寄稿者。

これらの人物をはじめとする一部のインフルエンサーによる情報発信に基づき、一般の人たちのコロナ・パンデミックの計画性や反ワクチン感情が醸成されている。実際、アメリカ国民のかなりの層は、パンデミックが人為的なものだと考えており、Pew リサーチセンターによれば、25%は「コロナウイルスの発生は権力者によって意図的に計画された」と間違いなく、またはおそらく真

実だと答えている。この数字は共和党／共和党寄りの人では34%，高卒以下の人では48%に増加する（Schaeffer 2020）。世界的に見ると、信じるレベルはブルガリアとエクアドルでもっとも高く（50%以上）、ドイツ、イギリス、日本、ボスニアで最も低い、それでも15%より大きい（Economist 2020）。

コロナウイルスやワクチンに対する明らかな陰謀論的解釈をする者以外でも、ヨガ界においてはワクチン接種への忌避の感情はきわめて大きい。

たとえば、2021年7月14日、ヨガ業界でもっとも多く読者をもつ英文誌『Yoga Journal』に、デンバー在住のコラムニスト、ウルフ・テリーによるエッセイ「Getting Vaxxed Was My Act of Ahimsa（ワクチン接種は非暴力の行い）」が掲載された。「アヒンサー（Ahimsa）」とは、古典ヨガや仏教の経典にも登場するサンスクリット語であり、「不殺生」「非暴力」などを意味する。現代ヨガにおいては、「他者も自分自身も傷つけないこと」を含め、食生活、動物の扱い、正義のための戦争や平和主義、紛争解決への姿勢などをめぐる複雑な議論に影響を及ぼしてきた概念となっている。

テリーはコロナ・パンデミックの時代に「アヒンサー」について熟考した結果、ワクチン接種を公衆衛生の美德、そして共感的な義務として捉える視点を提唱した。「アヒンサー」の直接的意味は殺さないことだが、彼女はワクチン介入の医学的・社会的利点を詳述した後、「その広く、より肯定的な意味は単純だ。愛することだ」と記している。実際、彼女のエッセイには、「COVID-19から自分を守ることは、私のコミュニティの人びとへの愛を示す方法だった」という副題がついている。

これに対する読者の反応はきわめて否定的であった。『Yoga Journal』が100万人のインスタグラムのフォロワーに向けて記事を投稿してから3時間以内に、この投稿には1000件以上のコメントが集まった。24時間後には、同誌のインスタグラムのスレッドは3500件近いコメントに膨れ上がる。それらのコメントのほとんどは記事への批

判的内容であった。『Yoga Journal』誌での220万人のFacebook フォロワーのコメントも同様である（Remski 2021）。

コメントの典型例はつぎのような内容であった。

- ・恥を知れ！ ヨガ実践者として、また長年ヨガスタジオを経営している者として、これはアヒンサーでは絶対ない！ これ以上言うことは何もない……絶対に同意などできない！
- ・『ヨガ・ジャーナル』からこんな記事が出るとは、とても残念だ。ヨガ実践者として、自分の体を大切にしたいと思うべきではないのか？ よく知られた毒を自分の体に注射することが、自分や他人に対する「非暴力」を示すとしてもいうのだろうか。まったくのナンセンスだ。

文化史家で、陰謀論とニューエイジの関係を探るポッドキャスト「コンスピリチュアリティ」の共同運営者であるマシュー・レムスキーは、このようなワクチン接種に対する強い反発の理由をつぎのように分析している。

[コロナ・パンデミックがはじまってからの] 過去14ヶ月間、あるいはそれ以前の100年間、ヨガとウェルネスの空間を注意深く観察してきた人なら、テリーのエッセイに対する読者の反応に驚くことはないだろう。1920年代のインドのヨガ伝道師による似非医学的な姿勢から、英語圏でもっとも売れたヨガマニュアル、B. K. S. アイアンガー著『Light on Yoga』[1966年出版]のほとんどすべてのページまで、科学的根拠のない、壮大な医学的主張がなされているからである。（Remski 2021）

イギリス最大のヨガの会員組織である British Wheel of Yoga は、BBC への声明のなかで、同グループは、反ワクチンや反マスクの内容の促進を支持しないと述べ、コミュニティに陰謀論があふれていることを否定した（Cheeham 2021）。また、世界的に著名なヨガ指導者であるショーン・コーンをはじめとするウェルネス・コミュニティのメンバーは、Qアノンの陰謀論の拡散は自分たちの「真の価値観」を表していないと非難する共同声

明を発表している。しかしながら、ヨガやウェルネス・コミュニティのなかでは、ワクチンやそれを推奨する西洋医学に対する根強い不信が広がっているのが実情である。

3 陰謀論的スピリチュアリティがヨガ業界に広がる理由

2節で示したように、新型コロナが流行している間、陰謀論への関心は急速に高まっている。陰謀論はしばしば歴史的、宗教的、科学的な思想を混ぜ合わせ、政府や研究者、主流メディアが提供する事象やデータに関する「公式」な説明に異議を唱えるものである。そして、歪曲に基づいた代替的な物語を作り出し、ソーシャルメディアを通じて広く流布させる。本節では、こうした陰謀論の問題性を所与のものとした研究成果やメディアの論評を中心として、陰謀論的スピリチュアリティ急増の要因を探っていく。

1) コロナ・パンデミックがもたらした社会状況

心理学的見地からすれば、将来の予測がつかず、現状の理解がむずかしく社会不安が広がったときに、陰謀論はその不安を埋める役割を果たすべく増大する。パンデミック時に行われた調査では、感染症に関連した不安や抑うつと、陰謀論を信じる可能性の増加との間に関連性があることが示唆されている (Wiseman 2021)。つまり、今回のコロナ・パンデミックによるロックダウンや新しいタイプ (mRNA) のワクチン接種の必要に迫られるという社会不安が大きい状況においては、人びとは陰謀論にはまりやすいのである。

そもそも、ヨガコミュニティの人びとがQアノンに引きつけられたのは、他の誰もがそうするのと同じ原因である。ロックダウンとパンデミックによって、多くの人が対面状況でのサポートネットワークを奪われ、Qアノンのオンライン・コミュニティがコミュニティ感覚を提供し、かつて人びとがもっていたオフラインのコミュニティ・ネットワークに取って代わったのである (Halafoff et al. 2020)。また、陰謀論がヨガとウェルネスのコミュニティに根づいたのは、ヨガ業界の経営の悪化も関係する。アメリカでは、2020年にヨガ

スタジオの閉鎖が23%増加したという調査結果があり、何千人ものヨガ・インストラクターの収入が奪われている (Guerin 2021)。パンデミックがこの業界に与えた打撃はきわめて大きかったのである。

同時に、ヨガ界の一部の人びとにとっては、陰謀論への加担が直接的な利益に結びつく場合もある。前出のデジタルヘイト対策センター (CCDH) の調査によると、ヨガコミュニティ内のものも含め、反ワクチンの見解をもつインフルエンサーは、2019年以降、800万人近くのフォロワーを獲得していることがわかった。全部で3100万人がFacebookで反ワクチン団体をフォローし、さらに1700万人がYouTubeで同様のアカウントを購読している。CCDHは、この運動はソーシャルメディア企業にとって10億ドルの広告収入に値すると推定している (Checham 2021)。こうした人たちは、コロナワクチンに対する不安を煽り、それが認可されるまでのスピードを疑問視したり、ワクチンを取り巻く政治や医療体制の抱える諸問題に言及したりしつつ、自分たちのメッセージを広めてきたと批判されている。

ウェルネスやヨガのインフルエンサーたちは、パンデミック以前からすでに販売するサービスや商品 (たとえば、カウンセリングや本、講演など) をもっていた。パンデミックは、彼らがすぐにもっていたコンテンツを有効利用する機会となったのである (Remski 2021)。そして、多くのヨガスタジオが閉鎖され、大半のヨガインストラクターが収入面で苦勞している状況のなかで、こうした活動はある意味、パンデミックを乗り切る魅力的な方法であったと言えるだろう。

2) スピリチュアリティ文化特有の思考様式

コロナ禍において、陰謀論的スピリチュアリティが広がるのには、スピリチュアリティ文化特有の思考様式も関連している。

ウォードとヴォアスは、陰謀論的スピリチュアリティの形成は、2つの段階 (世代) に分けられると捉える。第1世代のプロバイダーは、1990年代初期から中期にかけてオフラインで活動を開始し、その後オンラインに移行してオフラインの活

動と並行してウェブサイトを開発した（Robertson 2013, 吉永 2021）。ウォードらは、2002年を第2世代の陰謀論的スピリチュアリティの始まりの年と位置づけている。これは、9.11アメリカ同時多発テロや政治的幻滅の高まりがこれまで以上の需要を生んだというだけでなく、2002年には、ウェブとそれへのアクセス、そのサブカルチャーが十分に発達し、陰謀論的スピリチュアリティの拡大に対応できるようになっていったからである。

陰謀論的スピリチュアリティは、単一の第1世代のプロバイダーが散在する状態から、大規模なチェーンへと広がっている。こうした文化潮流は、スピリチュアル市場の一角を占めるようになり、その顧客は、「闇の政府」や「シフト（地球規模での変容）」についての信念の解釈が自分の意見や好みにもっとも合う店舗を選んでショッピングをするような状況になったのである（Ward and Voas 2011, cf. Asprem and Dryrendal 2015）。

陰謀論的スピリチュアリティの主要テーマの1つとして「変容」がある。それ以外では、「目覚め」「気づき」「新しいパラダイム」「本当の自分が誰なのかを思い出す」「専制政治にノーを言う」などが挙げられる。これらは、現在のコロナ・パンデミックにおけるQアノンやパステルQアノンの活動、またその一部を支持するウェルネス・コミュニティの人びとが重視するテーマにそのまま妥当するように思われる。

ヨガの実践者は、常識に反して考えること、既存の価値観に疑問をもつことを奨励されている場合が少なくない。しかし、このことは、代替的パラダイムや隠されたパターンへの関心と密接に関係している。この隠されたパターンや世界についての代替的な見方をするという思考様式は、Qアノンが社会への不安や不信が高まる状況において構築されたという事実にもつながる。セルフケアと自己発見を重視するヨガの実践者にとってのコロナ禍は、自分たちの意に反するワクチン接種を求められ、選択の自由を奪われた状態である。こうしたなかで、Qアノンのメッセージは、政府や医療機関から見捨てられたと感じている人たちの

心に訴えかけたことと思われる。

スピリチュアル市場では、自己が究極の権威であると宣言するのが一般的である。この考えは陰謀論者と強く共鳴し、「自分で調べること」（陰謀論を推奨する材料を使うとはいえ）を人びとに促し、自分で判断するように仕向ける。科学的なアプローチとは異なるが、私たちは証拠をどのように評価するかについて検証する必要がある点では類似している（Voas 2021）。

マイケル・バーカンは、ほぼすべての陰謀論に見られる3つの原則として、1）偶然に起こるものはない、2）見かけ通りのものはない、3）すべてはつながっている、を挙げている（Berkun 2006）。同様の原則は、現代スピリチュアリティ文化の根幹をなすものである。言い方を換えれば、「スピリチュアリティの訓練を受けている人は、実は陰謀論的思考も同時に訓練している」ことになる（Remski 2021）。ヨガの実践者たちは、陰謀論にとって重要なこれら3つの核に基づく世界観の構築により、パブリックとプライベートそれぞれの生活をランダムな力に左右されにくいものにしていく。ここに陰謀論的スピリチュアリティの魅力の一端があると考えられる。

3) 代替医療の重視によるワクチンへの懐疑

コロナワクチンへの強い反発をきっかけに陰謀論に傾倒するのは、現代スピリチュアリティ文化の支持者たちが代替医療を重視していることにも密接に関わる。

陰謀論的スピリチュアリティは、主流の科学や医学に対して、2つの側面からの攻撃方法を展開している。まず、代替医療を支持するスピリチュアリティ文化の側面からは、西洋医学の研究者は型にはまるように訓練されているために、新しい視点に対して偏狭であるという考え方をもつ。陰謀論の側面からは、医師や科学者は隠された権力側に金で雇われた代弁者であるという考え方を強固なものにする（Voas 2021）。西洋医学、特に大手製薬会社の悪質なものとなると、大衆を病気にさせるよう陰謀を企んでいるとの考えが共有される場合もある。

ウェルネス・コミュニティの人たちは、ワクチ

ンを含む主流の医学に批判的なことが多く、ここに陰謀論への入り口を見出すことができる。一般的な、あるいは専門家のほぼ一致した見解に反する意見をもつ場合、なぜ他の人が自分の意見を拒絶するのかを説明する必要がある。一般の人たちは間違った情報をもっているかもしれないが、権力者は真実を知ることができるはずである。エリートによる秘密結社が自分たちの利権を守るために、その真実を隠しているに違いない、とするのが陰謀論の自然な帰結となる。

以上の考察により、現代スピリチュアリティ文化と陰謀論が重なり合う理由、とくにコロナ・パンデミック、ワクチン接種という西洋医学の知見に対して懐疑的な論調を展開する理由が明らかとなった。自由な発想、権威や組織への不信、ユニークな信念や経験、「隠れた」パターンや対応関係を見抜く傾向、代替医療のパラダイムへの魅力など、まさにスピリチュアリティ文化の担い手に求められる特徴と合致する点だと言えるだろう。

4 「陰謀論」への文化社会学的アプローチ

1) 社会病理としての陰謀論へのまなざし

これまでにまとめたコロナ禍での陰謀論の広がりについての分析のどこまでが妥当かはさておき、これらの議論はヨガ界の一部に浸透した反ワクチンの態度を逸脱的な社会病理の事例として扱っている点では一致している。ガーディアン紙の記事においてジャーナリストのシリ・カーラは、ウェルネス界の問題点をつぎのように指摘する。

50年近くも前から、ウェルネスの世界では、健康はカシミアのセーターのように自由に着たり脱いだりできるものだと考えられてきた。医者は信用できず、個人は自分の「ウェルネスの旅」に責任をもたなければならない。そして、コロナワクチン計画がはじまり、この反科学的な態度は、はるかに有害なものへと転化していった。(Kale 2021)

ジャーナリストの評価のみでなく、陰謀論についての従来の研究の大半は、それに対する病理学的分析だと言っても過言ではないだろう(辻

2021)。リチャード・ホフスタッターによる古典的な陰謀論研究のタイトルは、「アメリカ政治における偏執狂のスタイル」となっており、陰謀論を偏執狂のスタイルとしたうえで、善よりも悪により親和性があると負の評価を明確に示している(Hofstadter 1963)。陰謀論研究の多くは、自覚的か無自覚的かを問わず、このアプローチを踏襲しているように思える。実際、今回のコロナ・パンデミックにおける代替的な見方に対しても同様であり、非科学的、反ワクチンの陰謀論として一括りにする傾向にある(Buturoiu et al. 2021, Eberl et al. 2021)。たとえば、マスメディアでも取り上げられている陰謀論研究の第一人者であるジョセフ・ユージンスキらは、新型コロナに関する代替物語の意味について、「コロナウイルスの出現を間違った出所のせいにしたり、その深刻さを疑ったりすることの結果は、大規模に生命を脅かす可能性がある」とし、警告を発している(Uscinski and Enders 2020)。要するに、陰謀論への科学的アプローチのほとんどは、それが危険で非合理的であり、非科学的だと理解されているのである(Barkun 2003, Popper 2011 [1945])。しかしながら、陰謀論を社会病理として扱うことにより、代替的な世界観の構築プロセスやそれを支持する人たちへの理解が停滞してしまうという側面もある(Harambam 2020)。

果たして、コロナワクチンへの反発、政府や製薬会社への懐疑的態度は、非科学的なのだろうか。以下では、こうした陰謀論の問題性を一旦保留した文化社会学的アプローチを検討する。

2) 文化的パフォーマンスとしての陰謀論的言説

ここでは、陰謀論への文化社会学的アプローチをしたベルナデット・ジャウォルスキーの議論(Jaworsky 2021)を手がかりにこの問題を検討していく。彼女の論文では、コロナ・パンデミックの計画性やワクチンの危険性を告発したドキュメンタリー『プランデミック I』(2020年5月4日公開)とその続編『プランデミック II』(2020年8月18日公開)、およびその主人公である免疫学者、ジュディ・ミコヴィッツ博士の事例を検証している(Willis 2020a, 2020b)。その際、「パフォ

ーマティブな陰謀（performative conspiracy）」という概念を通じて、陰謀論への中立的な理解を試みている。『プランデミック』というドキュメンタリー映画は、コロナ・パンデミックという（現在進行形の）深刻な社会的ドラマのなかでの文化的パフォーマンスであることをジャウォルスキーは主張する。

まずジャウォルスキーは、対象へのアプローチに関して、アメリカの文化社会学者ジェフリー・アレキサンダーらの立場を採用し、社会学者の役割は、社会生活のあらゆる側面を貫く意味の次元を把握し、「それらを解釈し、その力を理解し、それらが政策、結果、意見、技術、行動、政治、好み、消費、身振り、表現を形成する『原因』としていかに考えられるかを知ること」であるとする（Alexander and Smith 2018）。すなわち、コロナ・パンデミックにおける社会学者にとっての重要な課題は、文化と意味づけのプロセスを主題とする「意味第一（meaning first）」の認識論を取り入れることにある（Alexander and Smith 2020）。

ジャウォルスキーは、自らの研究が「陰謀論の社会学」に位置づけられるとしている。しかし、彼女は「陰謀論」という語自体が否定的な意味合いをもつことを考慮して、陰謀をめぐる活動のプロセス的・実行的な性質を強調するために、「陰謀の理論化（conspiracy theorizing）」という語を使用する。彼女はまた、陰謀論に携わる人びとを規範的に捉えるのではなく、彼らの意味形成の過程を理解しようとする。したがって、陰謀の理論化の文化社会学的議論を展開するにあたり、ジャウォルスキーはより中立的で蔑視的でない「パフォーマンスティブな陰謀」という用語を作り出す。

このパフォーマンスティブという概念もアレキサンダーの議論を踏襲したものである。2000年代前半から半ばにかけて、アレキサンダーらは、「文化的パフォーマンス」の語用論に関する一連の理論を展開した（Alexander 2004）。簡単に言えば、文化的パフォーマンスとは「行為者が個人的に、あるいは協調して、自分たちの社会的状況の意味を他者に示す社会的プロセス」である。そのパフォーマンスの成功は、自らのパフォーマンスが真

実であると他者に納得させる能力にかかっているとする立場である（Harambam 2017, Harambam and Aupers 2015）。

ジャウォルスキーはまた、陰謀論が反科学的な特徴をもつとする点に疑問を投げかける。たとえば、アミット・プラサドは、反科学的な誤報や陰謀が、さまざまな社会集団の内部で、あるいは集団によって、どのような言説として作られ、枠にはめられ、解釈されているかを研究者が分析しなければならないと論じている。彼は、「コロナウイルスのパンデミックは、実際、ポスト真実の時代と呼ばれるものの新たな火種となった」と示唆している（Prasad 2021, see also Baines et al. 2021, Kearney et al. 2020, 『YOGA YOMU』2022）。

これに対して、マイケル・リンチは少し異なる議論を展開し、「反科学」は現在の情勢を特徴づけるのに最適な表現ではないかもしれないと主張する。陰謀論として扱われる多くの言説は、科学への反発とは程遠く、科学的権威の象徴や慣用句を選択的に利用しているからである。おそらく問題は、反科学そのものではなく、見解の相違を公にする際に、過度に一般化された科学的主張にすり替わってしまい、洗練された議論が成立していないことが問題であると指摘する（Lynch 2020）。

この後の分析で示すように、『プランデミック』のケースは、この議論を端的に示す例であり、反ワクチン陰謀論の拡散に用いられたとするこのドキュメンタリーの主張は、「科学」と「真実」に大きく依存しているのである。

3）（物語）の多様性への着目

ジャウォルスキー論文の分析セクションでは、コロナ・パンデミックをめぐる深刻な社会的ドラマのなかにある、相反する物語を詳しく記述する。主流派の言説を大まかにまとめると、「ウイルスは実験室ではなく自然に発生した」「危険だからルールを守り、マスクをつけ、社会的距離を置くべきだ」「ワクチンが開発されれば事態は収束に向かうだろう」というものである。ヒーローは、私たちの利益を最優先する主要な保健機関である世界保健機関（WHO）やアメリカ疾病管理センター（CDC）、そしてアンソニー・ファウチ

博士のような医学界のリーダーであり、悪役はウイルス、そしておそらく自然そのものとなる。

一方の『プランデミック』の物語は、ウイルスが事前に計画されたシナリオの一部である可能性が高いこと、ウイルスの蔓延を防ぐ方法について従来の常識を疑うべきこと、ワクチン接種の広がりには地球規模での大惨事に終わることを示唆している。ヒーローはジュディ・ミコピッツ博士と「目覚めた」科学者や医療専門家の数百人の人びとであり、悪役は大手製薬会社、ビル・ゲイツ、その他パンデミックから利益を得る人たちである。

いずれの物語も、科学対盲信、真実対欺瞞、証拠対仮説など、同じ二項対立のまとまりを呼び起こしていることが重要となる。一方の主流では、科学、証拠、真実という聖なる三者が人類を深刻な危機から救い出すという、終末の切迫した状況から救済される物語に人びとは出会うことができる。他方、『プランデミック』が提示する代替物語は、悲劇的なトーンで始まり、まさに科学、真実、証拠という主流派と同じ力によって繰り広げられる「腐敗の疫病」を生み出し、「何百万人を殺す」ことになる恐怖の物語へと終末論的に発展する。この映画（社会ドラマ）を見る人は、その悲惨な警告と予測を見誤ることなく、科学と医学の世界、とりわけコロナ・ウイルスの大流行に関しては、何かがひどく間違っており、私たちは本当の事実「目覚め」しなければならないということになる。

科学、証拠、真実という聖なる三者のみでなく、覚醒と自由をめぐる二項対立もある。主流の物語の場合、CDC、WHO、アンソニー・ファウチといった確立した科学的権威に耳を傾けることで覚醒が訪れ、ウイルスからの解放につながるとしている。逆に、『プランデミック』の物語は、その権威に挑戦する人びと、つまり従順な人びと（Sheeple）の目を覚まさせようとする科学的内部告発者をヒーローにする。陰謀とその実践であるマスク着用やワクチンを拒否する自由は、「私たちの共和国」の憲法で保証された権利として演じられる（Jaworsky 2021）。

ジャウォルスキーは論文を締め括るにあたり、人びとは、単に「正しい」物語に「目覚めた」だけなのだろうかとの問いかける。結局のところ、パフォーマティブな陰謀が奨励する証拠や事実に基づくデータについての批判的思考や研究は、ウォーターゲート事件やイラン・コントラ事件、喫煙と肺がんの関係を隠すタバコ会社といった実際の陰謀を暴くことにつながる部分があることを彼女は指摘する。つまり、陰謀の理論化には、社会への異議申し立ての役割も含まれていると言えるだろう。

しかしながら、ある物語が他の物語より勝っているかどうかについて、一般の人たちが正解をえることはできない場合が大半である。現代社会における物語はしばしば解決ではなく、まったく相反する考えや感情を抱いたままで終わる可能性は高い。ジャウォルスキーは真実の不確実性にふれつつ、文化社会学の意義をつぎのようにまとめる。

何が実際に「真実」なのかを決定する文脈は、実に移り変わりやすいものである。右翼的なイデオロギーと科学への信頼の喪失には間違いなく相関があるが、要は反科学であるとかポピュリストであるとか、ポスト真実の時代に生きているということではない。陰謀の理論化についての文化社会学は、両極化した派閥でさえ、その意味形成の過程において同じ聖なるコードを用いていることを明らかにするものである。

本節ではジャウォルスキー論文を参照しながら、陰謀論的スピリチュアリティに対する文化社会学のアプローチを検討してきた。彼女が論じるように、何が実際に「真実」なのかを決定する文脈は実に移りやすい。主流派の提示する物語のなかでも、「ワクチンが開発されれば事態は収束に向かうだろう」という物語は2021年春頃にはすでに破綻している。ワクチン接種率の高い国でも低い国でも感染者数やその増減の波に大きなちがいはないからである。また『プランデミック』側の主張ほどでないにせよ、ワクチン接種による死亡や深刻な後遺症を訴える人たちも相当数いる

からである。さらに、ワクチン未接種者の感染率が高くなるようなデータ操作が明らかとなり、データ修正後には接種者、未接種者で感染率にちがいがなくなるなど、非主流派のこれまでの主張はより真実味を帯びることになっている（朝日新聞デジタル 2022）。

こうした現在進行形の事象を研究対象とする場合には、文化社会的アプローチ、すなわち、公共圏で起こる物語の競合に焦点をおき、主流と代替の物語の両方を何らかの形で同等に分析することが不可欠となる。そして両者の物語を生み出す根底にある二項対立のコードを特定して、現在おこなわれている激しい論争を照らし出すことは有益であるだろう。文化社会的アプローチはまた、社会的行為者の意味形成や諸制度が展開する文脈をよりよく理解するのに役立つと思われる。

5 「世俗の時代」における多様な世界観の競合

本稿では、コロナ・パンデミックのなかで目立つ存在となったウェルネス・コミュニティに広がる陰謀論的スピリチュアリティについて究明した。今回のパンデミックによる社会不安が増大した状況において、一連の騒動はディープステートにより計画されたものであると主張する人びとの数が増加した。ヨガ界にも浸透したパステルQアノンと呼ばれる現象が生じた要因についても、スピリチュアリティ文化特有の思考様式や代替医療を重視する傾向などとの関連で考察してきた。

本稿ではまた、陰謀論的スピリチュアリティを逸脱的な社会病理現象として自明視せず、そうした信念体系を文化的パフォーマンスとして中立的に扱い、当事者たちの意味形成に着目する文化社会的アプローチを検討した。ウェルネス・コミュニティの人びとの重視する代替医療を含むホリスティックな世界観や諸実践は、主流文化が直面する問題への社会的異議申し立ての役割を担っていることも視野に入れる必要がある。現代のテクノロジー、医療、統治に対する多くの人々による疑問や批判のなかには、裏づけのある情報に基づいた、もっともな問題提起を含んでいるように思われるからである。特に彼らがホリスティック

で持続可能な生き方や癒しを目指し、科学によってその正当性が支持されている考えや実践を採用している場合、そのような傾向が強いと言えるだろう。今回のコロナ・パンデミックやワクチンに関する科学的知見は、研究者によっても、また刻々と変化する壮大な社会実験のステージによっても大きく異なる。したがって、単純に誤情報を広める陰謀論として切り捨てることができない論点を多く含んでいる可能性も十分あると思われる。

しかしながら、自らの信念体系の正当性を主張する活動は、ときとして過激派による運動の多くと共通する排他的な特徴をもつことになる。Qアノンを含むトランプ支持者たちによるアメリカ議会議事堂侵入事件はその一例である。また反ワクチンデモなどの陰謀論的スピリチュアリティに関連する活動においても、信奉者は「本当の真実」に通じていて、したがって主流派よりも賢明であると確信している場合があると思われる。彼らは自分たちが迫害されていると考え、最終的に自分たちの正当性が証明されると信じ、ときには非合法的手段を用いる可能性のある点を見過ごしてはならない。

現代スピリチュアリティ文化は個人化され、その担い手たちは個人の自由意思に基づき、多様な信念や実践のなかから選択して自らにふさわしいライフスタイルを構築してきた（伊藤 2021）。だからこそ、多くの人びとは個人の自由を脅かすコロナ感染関連の社会統制に対して強く反発したのである。今回のコロナ・パンデミックが発生する以前のヨガ、瞑想、アーユルヴェーダなどを含むスピリチュアリティ文化は、主流文化に溶け込み、ウェルネス産業は多くの人々にとっての消費文化として理解されてきた（Jain 2014）。しかし、当事者たちの重視する代替医療やその前提となる世界観が否定されたとき、その担い手たちの一部は、一般社会の政策に強い抵抗を示すことになった。多くの人々にとってのウェルネス・コミュニティでの活動は、消費文化としてだけでは捉えられない側面のあることが明らかとなったのである。

最後に、コロナ・パンデミックをめぐる多様な物語が生じる現代社会の特徴について考察し、本稿を締め括りたい。

コロナ・パンデミックにおいて陰謀論が急増した要因や、そうした言説を逸脱的行為として扱うかどうかなどについては、研究者によって見解の大きく分かれるところである。しかし多くの社会理論家たちは、現代の陰謀論（あるいは陰謀の理論化）は、近代全体、あるいはポスト近代の社会状況への応答なのだという点では一致している。たとえば、カール・ポパーは、「開かれた社会」に関する著作のなかで、社会の陰謀論を「宗教的迷信が世俗化した典型的な結果」とであると特徴づけた（Popper 2011 [1945]: 303）。より最近では、ネフェスとロメロ＝レチェは、陰謀論が増大する状況として、現代世界の合理化、世俗化、脱魔術化の進展を挙げている。彼らは、これらの諸力は「伝統的な世界観や信念を侵食し、科学による暫定的手法や官僚制に基づく抽象的形式と置き換えるが、社会的現実に究極の答えや意味を明確に与えることはできない」と指摘する（Nefes and Romero-Reche 2020: 101）。いずれの立場においても、陰謀論の発展には世俗化、すなわち伝統的世界観や社会全体を包摂する宗教への信頼が失われてしまっていることが根本的な問題であると捉えているように思われる。

陰謀論的スピリチュアリティを広義の宗教と捉えたと、本稿の議論の多くは現代宗教が直面する価値観の多様化・相対化の問題として理解可能となる（Berger 1967）。現代社会において、人びとの寛容度は高く、それが現代人の道徳的美徳でもある。多くの人びとは自分の宗教が正しいと主張するよりも、宗教的相対主義を受け入れているように思われる。しかし、もしすべての信仰が平等であるなら、私たちは何を信じるべきかをどうやって決めればいいのかについては明らかではない（Voas 2021）。

2007年に刊行された大著『世俗の時代』において、チャールズ・テイラーは世俗化の3類型を提示し、従来の世俗化論を大幅に更新する議論を展開している。テイラーによれば、世俗性Ⅰは、

公共空間から宗教が撤退し、政教分離が進む状態であり、世俗性Ⅱは、宗教的信条と実践の後退を指す。これら2つの状況がこれまでの世俗化論の多くの全体像であった。テイラーの議論の真骨頂となる世俗性Ⅲは、「神信仰が挑戦を受けることなく、まさに当たり前のものとして受け止められていた社会から、さまざまな選択肢があるなかでの1つの選択肢——しかもしばしば簡単には受容できない選択肢——として受け止められるような社会への移行」（2007=2020上: 3）を指す。つまり、神信仰が選択肢の1つとなること、言い換えれば神を信じないこともまた同様に選択可能になることを意味する。要するに、テイラーによる世俗化の議論で重要なのは信仰する、しないではなく、その信仰の条件の変容である。

テイラーの論じる、さまざまな選択肢が存在し、人びとはそのうちのどれかを選ぶという状況は、まさにコロナ・パンデミックにおいて、主流派のみでなく、それ以外にも複数の物語が存在していることにつながる。

テイラーは1960年代に、少なくとも北米とヨーロッパにおいてある種の文化的変容が起きたと考え、彼はそれを「本来性（authenticity）の時代」と呼ぶ。本来性の文化とは、18世紀後半のロマン派的表現主義とともに出現した生の理解を意味する。その理解によれば、「各人は人間性を実現する自分自身の方法を保持しており、自分自身のあり方を発見しそれを生きることが重要である」とする考え方である（Taylor 2007=2020: 560）。この本来性の文化が大衆的なレベルで実現したのが1960年代以降となる。一方で全体性を、他方でスピリチュアルな深みに至る自分の道を発見することを重視する本来性の倫理を、テイラーは肯定的に論じている。しかし、私たち現代人にとって、競合する複数の「正しい物語」のなかから自分にふさわしい物語をたえず取捨選択しなければならない日常は、かならずしも居心地のよいものとは限らない。

この本来性の時代に生きる人びとは、自らの感性によって本物だと響くものを選択して特定の信念体系を構築することになる。その組み合わせは

個人の感性に依拠するため、自己に絶大な信頼をおく社会であるとも言える。しかしながら、自らの選択した信念体系（あるいはその不在）には、他者への寛容さ、価値観の相対化も相まって、確証がもてないことも受け入れるしかない。コロナ禍での人びとの意味形成の仕方が異なり、ときとして信念や実践方法が競合するのは、私たちが「世俗の時代」を生きているからにほかならないのである。

参考文献・URL

- Alexander Jeffrey. 2004. "Cultural pragmatics: Social performance between ritual and strategy." *Sociological Theory*, 22(4): 527–573.
- Alexander, Jeffrey, and Phillip Smith. 2018. "The strong program in cultural sociology: Meaning first." pp. 13–22 in Grindstaff L, Lo M-CM, Hall JR, (eds.) *Handbook of cultural sociology*, London: Routledge.
- Alexander, Jeffrey, and Phillip Smith. 2020. "COVID-19 and symbolic action: Global pandemic as code, narrative, and cultural performance." *American Journal of Cultural Sociology*, 8: 263–269.
- Asprem, Egil and Asbjorn Dyrendal. 2015. "Conspiratorial reconsidered: how surprising and how new is the confluence of spirituality and conspiracy theory?" *Journal of Contemporary Religion*, 30(3): 367–382.
- 朝日新聞デジタル 2022.6.6 「接種せず感染した人数を多めに公表 厚労省と官房長官、説明に矛盾も」 <https://www.asahi.com/articles/ASQ664JT1Q65UTFL005.html> (2022.9.1確認)
- Baines, Annalise, Muhammad Ittefaq, and Mauryne Abwao. 2021. "#Scamdemic, #Plandemic, or #Scaredemic: what parlar social media platform tells us about COVID-19 vaccine." *Vaccines*, 9, 421.
- Barkun, Michael. 2006. *A culture of conspiracy: Apocalyptic visions in contemporary America*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Berger, Peter. 1967. *The sacred canopy: Elements of a sociological theory of religion*. New York: Doubleday. = 1979. 蘭田稔訳『聖なる天蓋』新曜社
- Buturoiu, Raluca, Gergiana Udrea, Denisa-Adriana Oprea, and Nicoleta Corbu. 2021. "Who believes in conspiracy theories about the COVID-19 pandemic in Romania? An analysis of conspiracy theories believers' profiles." *Societies*, 11, 138.
- Cheetham, Joshua. 2021. Feb. 19. "Does yoga have a conspiracy theory problem?" *BBC News*.
- Eberl, Jakob-Moritz, Robert A. Huber, and Esther Greussing. 2021. "From populism to the 'plandemic': why populists believe in COVID-19 conspiracies." *Journal of Elections, Public Opinion and Parties*, 31(S1): 272–284.
- Economist*. 2020. Jun. 6. "Return of the paranoid style: fake news is fooling more conservatives than liberals.
- Evans, Jules. 2020. Apr. 17. "'Conspiratoriality'—the overlap between the New Age and conspiracy beliefs." <https://julesevans.medium.com/conspiratoriality-the-overlap-between-the-new-age-and-conspiracy-beliefs-c0305eb92185> (2022.9.1確認)
- Guardian 2021. Jul. 17. "Majority of covid misinformation came from 12 people, report finds."
- Guerin, Cecile. 2021. Jan. 28. "The yoga world is riddled with anti-vaxxers and QAnon believers." *Culture*.
- Halaloff, Anna, Enqi Weng, Cristina Rocha, Andrew Singleton, Alexandra Roginski, and Emily Marriott. 2020. Dec. 30. "Opinion: the pandemic has provided fertile conditions for conspiracy theories and 'conspiratoriality' in Australia." ABC Religion & Ethics.
- Harambam, Jaron. 2017. *"The truth is out there": conspiracy culture in an age of epistemic instability*. Rotterdam: Erasmus University.
- Harambam, Jaron, and Stef Aupers. 2015. "Contesting epistemic authority: Conspiracy theories on the boundaries of science." *Public Understanding of Science*, 24(4): 466–480.
- Harambam, Jaron. 2020. *Contemporary conspiracy culture: truth and knowledge in an era of epistemic instability*. New York: Routledge.
- Hoback, Cullen. 2021. *Q: Into the storm*. 日本語版『Qアノンの正体』（ドキュメンタリー、全6話）
- Heelas, Paul and Linda Woodhead. 2005. *The spiritual revolution: why religion is giving way to spirituality*. Oxford UK: Blackwell.
- Hofstadter, Richard. 1963. *The paranoid style in American politics and other essays*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 井上弘貴・渡辺靖 2021 「現代アメリカ社会における〈陰謀〉のイメージーション」『現代思想』5月号、特集「陰謀論」の時代
- 伊藤雅之 2021 『現代スピリチュアリティ文化論——ヨーガ、マインドフルネスからポジティブ心理学まで』明石書店
- Jain, Andrea. 2014. *Selling yoga: from counterculture to pop culture*. Oxford, UK: Oxford University Press.

- Jaworsky, Bernadette Nadya. 2021. Everything's going according to Plan(demic): a cultural sociological approach to conspiracy theorizing. *American Journal of Cultural Sociology*.
- Kale, Sirin. 2021. Nov. 11. "Chakras, crystals and conspiracy theories: how the wellness industry turned its back on Covid science." *The Guardian*.
- Kearney, Matthew, Shawn Chiang, and Phillip Massey. 2020. "The twitter origins and evolution of the COVID-19 'plandemic' conspiracy theory." *Harvard Kennedy School Misinformation Review*, 1(3).
- Lynch, Michael. 2020. "We have never been anti-science: reflections on science wars and post-truth." *Engaging Science, Technology, and Society*, 6: 49–57.
- McGowan, Michael. 2021. Feb. 24. "How the wellness and influencer crowd serve conspiracies to the masses." *The Guardian*.
- Meyer, Mamien. 2021. Aug. 29. "From asana to antivax: how yoga is helping to spread conspiracy theories." *The Sunday Times*.
- Nefes, Turkey Salim, and Alejandro Romero-Reche. 2020. "Sociology, social theory and conspiracy theory." pp. 94–107 in *Routledge Handbook of Conspiracy Theories*. Abington, UK and New York: Routledge.
- Popper, Karl. 2011. [1945]. *The open society and its enemies*. London and New York: Routledge.
- Prasad, Amit. 2021. "Anti-science misinformation and conspiracies: COVID-19, post-truth, and science & technology studies (STS)." *Science, Technology and Society*, 27(1): 88–112.
- Remski, Matthew. 2021. Jul. 18. "How Yoga Journal set off an anti-vac backlash." *The Conspiracy Report*.
- Robertson, David. 2013. "David Icke's reptilian thesis and the development of New Age theodicy." *International Journal for the Study of New Religions*, 4.1: 27–47.
- 佐藤清子 2021 「2020年のアメリカにおける宗教——コロナ・BLM・大統領選と信教の自由」『現代宗教 2021』公益財団法人国際宗教研究所
- Schaeffer, Katherine. 2020. "A look at the Americans who believe there is some truth to the conspiracy theory that COVID-19 was planned." Pew Research Center, 24 July.
- Taylor, Charles. 2007. *A secular age*. Harvard University Press. = 2020. 千葉真監訳『世俗の時代』名古屋大学出版会
- 辻隆太郎 2021 「陰謀論へのイントロダクション」『現代思想』5月号, 特集「陰謀論」の時代
- Uscinski, Joseph. 2020. *Conspiracy theories: A primer*. Landham, MD: Rowman and Littlefield. = 2022. 北村京子訳『陰謀論入門』作品社
- Uscinski, Joseph and Adam Enders. 2020. May 18. "The coronavirus conspiracy boom." *The Atlantic*.
- Voas, David. 2021. Aug. 13. "Opinion Conspiracy—populism in the spiritual supermarket." ABC Religion and Ethics.
- Ward, Charlotte and David Voas. 2011. The emergence of spirituality. *Journal of Contemporary Religion*, 26(1): 103–121.
- Willis, Mikki. 2020a. *Plandemic* (film). May 4. <https://freedomplatform.tv/plandemic-original-segment/>. (2022.9.1確認)
- Willis, Mikki. 2020b. *Plandemic: Indoctrination* (film). August 18. <https://freedomplatform.tv/plandemic-indoctrination-world-premiere/> (2022.9.1確認)
- Wiseman, Eva. 2021. Oct. 17. "The dark side of wellness: the overlap between spiritual thinking and far-right conspiracies." *The Guardian*.
- 吉永進一 2021 「陰謀論と円盤をめぐる, 2, 3 の事柄」『現代思想』5月号, 特集「陰謀論」の時代
『YOGA YOMU』2022.1月「特集 スピリチュアルはサイエンスを否定する?」70号